

病気になっても安心して旅行ができるシステムを作るために

澤 功（澤の屋旅館主人） ※この記事は日観連機関誌の2008年6月号に掲載されました。

5月31日、東京で開催された第一回「訪日外国人の医療と医療通訳を考えるシンポジウム」にパネラーとして参加してきました。医療関係、通訳業界、旅行業界など180名を超える人たちが参加し熱心な討論が、かわされました。

近年、外国人旅行者の増加に伴い日本の医療機関にかかるケースが増加していますが、英語が母国語でない旅行者も多く医療受診時の意思疎通が上手くいかないことで十分な治療ができないことがある。そこで、医療者と患者のコミュニケーションをつなぐには、医療通訳の存在が不可欠である。そこで医療現場と医療通訳システムの整備をして外国人旅行者が病気になっても、安心して旅行できるシステムを作るためのシンポジウムでした。

「外国人医療の現状」について、りんくう総合医療センターの南谷先生は、近年、外国人患者受診数が増加し続けていること、そして、その生々しい症例をいくつか話されました。また、言葉、文化、経済力の問題で救えない命があるので、医療通訳制度を含め、よりよい外国人医療システムを構築すべく奮闘していると話されました。

「外国人宿泊施設における医療問題」という演題で、私は澤の屋の現状を話しました。

頭が痛いから薬をといわれたら旅館では、あげられないので、医療用語の対訳書を見せて、お客様の症状を聞き、紙に書きそれを薬局に持って行って自分で購入してもらいます。薬箱には日本語しか書いてないので用法や用量を聞かれたら教えてあげます。腰痛で病院に行きたいと言われた時は、義母の時代からのかかりつけの猪狩医院を紹介し、澤の屋に宿泊していると言えば、必ず診察してくれます。

日曜、祭日には、近くの東大病院や日本医科大学を紹介し、私どもではカード番号で予約を受け、パスポート番号をもらっているのもこれまで、支払いでのトラブルはありません。

救急の場合は救急車を呼びますが、言葉の問題があるのか受け入れ先が見つかるまで時間がかかります。付き添ってお客さまが、カードしか持っていないので立て替え払いを何回かしたことを話しました。

「医療と言語の問題点」については中国語通訳者の飯田さんが話しました。

日本では、医療通訳は職業化が進んでおらず多くはボランティアが担っているのが現状である。医療通訳には医療用語などの専門用語や知識の習得が必要なので、認定制度の整備や医療通訳が専門職として認知されるような報酬や倫理綱領など含めた制度を確立していかなければという話でした。

基調講演では、西山先生は日本は国民皆保険制度で、医療がスムーズに受けられるが、外国人はこれを利用することができないから自由診療になる。そこで日本の旅行保険への加入促進や、訪日外国人の専門的対応施設としてトラベルファーマシー（薬局）とトラベルクリニックを指定、拠点化し、これらの施設に医療通訳ネットワークのシステムを構築することを提案されました。

病気のお客さまを病院に送りこむことしかやっていた私に外国人の増加で医療現場で起こっていること、それに宿泊施設として何をすべきか考えさせられるシンポジウムでした。